第30回熊本市民美術展 熊本アートパレード

審査員講演会

日時　2019 年 3 月 21 日（木・祝）13:30–15:30
場所　熊本市現代美術館 ホームギャラリー
講師　都築響一（編集者、ジャーナリスト、写真家）

第30回熊本市民美術展 熊本アートパレード
会期　2019 年 3 月 20 日（水）– 3 月 31 日（日）
会場　熊本市現代美術館 ギャラリー I・II

はじめに

司会　第 30 回熊本市民美術展熊本アートパレード審査員講演会を開催いたします。あらためまして審査員を務めていただきました都築響一さんをご紹介します。

　都築さんは、編集者、ジャーナリスト、写真家として東京を拠点に活動されています。ご存知の方も多いかと思いますが、1976 ～ 1986 年まで『POPEYE』や『BRUTUS』といった雑誌に、フリーランスの編集者として携わられました。1993 年には、東京の若者が暮らす独創的な部屋を撮影した写真集『TOKYO STYLE』（京都書院、1993）を発表されました。また、日本各地の珍妙なスポットを取材した写真集『ROADSIDE JAPAN 珍日本紀行』（アスペクト、1997）では第 23 回木村伊兵衛写真賞を受賞されています。現在も日本及び世界のロードサイドを巡る取材を続行中ということで、今日はこの熊本という場所に来ていただきました。では都築さん、どうぞよろしくお願いいたします。

都築　都築響一です。よろしくお願いいたします。ほんとにおもしろい公募展に呼んでいただいて、楽しみながら審査もさせていただきました。

　これまでの熊本アートパレードは、すごく立派な作家の方とか、美術評論家の方が審査員になっていたと思うんですけども、僕はそのどちらでもない。というか、別に美術が本業ではない。ただの編集者ということなので、ちゃんとした基準もなく勝手に選ばせていただいて、むしろ恐縮でした。

　アートもそうだしデザインもそうだし、いろんな分野で 20 歳頃から 40 年以上、アートに限らずいろんな分野の取材をしています。

　「現代美術」から「現代アート」と最近言われているらしいですけども、この「現代」という単語がつくとだいたい難しくなるわけですよ。ね？　たとえば「現代音楽」とか、「現代詩」とか、「は？」みたいな感じがあるじゃないですか。ただの文学や音楽なら分かりやすいけど、「現代」がつくと、とたんに。建築に「現代」って名がつくと、いきなり冷たいコンクリートを感じるし。「現代美術」も、モロそうだと思うんですよね。

　皆さん気がついていらっしゃるかどうかわかりませんけれども、この会場の天井にある青いやつ。これ実は照明じゃなくて、ジェームズ・タレルというすごい有名な作家の作品（《Milk Run Sky》2002）なんですけれども、ま 99％の人にとってこれってただの照明ですよね。別にこれをバカにしてるわけじゃないんだけれども、やっぱり難しくすることが高級だということを、僕たちは小学校の頃から延々植え付けられてる感じがするんです。

　僕がバンドをやりたいと思ったら、まずギターを買って練習するじゃないですか。それで、コードが三つ弾けるようになったら歌い出すと思うんですよね。バンドをやりたいからって、いきなり音楽大学は目指さない。だから、ラッパーになりたいと思ったらノートを買ってリリックを書けばいいだけで、文学部国文学科は目指さない。

　でも、アーティストになりたいという人は、まず美大を受けなきゃいけないということがいまだに常識としてある。それで、美大を受けるためには、まず美術予備校に行かなきゃならない。

予備校に行くと、デッサンの練習とかをさせられるわけですよ。2500 年ぐらい前のギリシャ人の顔とかを描かされるわけです。「誰これ?」みたいな。あと三角錐とか、そういうのを描かされるわけです。

それまで勉強は出来ないけど絵を描くことだけが好きだったみたいな子は、そこでまず挫折を味わうわけ。でね、難しい美術大学はなかなか一発で入れなかったりする。東京藝大なんていまだに十浪とかいますからね。十浪ですよ。十浪して入ったら 28 歳です。一体その 10 年間は何だったんだと。ギリシャ人の顔を描くのが上手くなっただけみたいな。そういうふうにして美大に入った瞬間に、ようやく好きな絵を描いていられるのかと思うと、いや絵を描く前にまずコンセプトを語れ、みたいな話になる。他人にちゃんと話せるぐらいだったらアーティストにはならないかもしれないのに。そうやって、絵を描くのが好きだっただけの純粋な気持ちがどんどん萎えていくわけ。

そういう不思議な状況に今、現代美術というのがある。こういうことの中で、アマチュアの絵を見ることの大切さというのがあるんじゃないかなというのを、僕はすごく思うようになってきました。音楽に喩えると分かりやすいと思いますが、音楽にも色々あって、たとえばコンサートホールで聴くような立派な音楽がある。それから CD がいっぱい売れるようなミュージシャンがいる。それからみんなでカラオケで歌う音楽っていうのもありますよね。で、今回、熊本アートパレードに出ているような作品っていうのは、みんながカラオケで歌う曲なんじゃないかなと僕は思ったわけです。コンサートホールでモーツァルトとかを聴く人と、カラオケで歌う人がいる。一体どっちが多いかって言ったら絶対カラオケ人口なわけですよ。だけれどもそっちが音楽として語られることはない。

fig. 1　スナック街

fig. 2　来夢来人

僕は、10 年ぐらい前からカラオケスナックというものにすごく興味を抱くようになりました。全国のスナック巡りを仕事としてするためにちょっと調べてみたら、日本で一番多いカラオケスナックの名前は「来夢来人（ライムライト）」だという説がでてきました。「来る夢、来る人」って書くやつね。それで、『アサヒカメラ』というカメラ雑誌を口説いて、全国の来夢来人っていう名前のスナックを取材に行くという無茶な企画をやってたんですけど、そうすると、みんなが歌う歌っていうのがあるじゃないですか。それはオリコンのヒットチャートに出てくるのとは全然違う

わけですよ。今オリコンのシングルチャートというのは、1 位から 10 位まで乃木坂とかそういうアイドルもの、あとは EXILE やジャニーズ系、これで占められてます。でもカラオケだとここ数年、不動の 1 位を保ってるのは中島みゆきの「糸」なんですよ。だから業界が歌わせよう、買わせようとしている音楽と、みんなが歌いたい歌はここまで違ってしまったわけです。

昔は美空ひばりという人がいて、業界あげて売ろうとしてたし、みんなも仕事しながらひばりちゃんの歌を口ずさむみたいなことがあったけど、今はもう違う。こんなふうに業界が売りたい物と僕達が欲しい物がここまで離れちゃったのが、すごく悲しい現実であって、美術も一緒だと思うんです。

現代美術作品が画廊から画廊へ、コレクターからコレクターへと回されているうちに何千万、何億という値段がついて投資の対象になっていく一方で、みんなが「好きだから描いているだけ」とか、「どうしても、これを描きたいから描いてるだけ」みたいなものが、まったく顧みられないでいることがすごい不思議だなと、ずっとアートを見ていて思います。

じゃあ、自分なりにバランスを取るためにはどうしたらいいかというと、こんなことを美術館で言うのもなんですが、要するに「美術館の外に出ろ」と。「美術館の外にもいいもの、おもしろいものがいっぱいある」と。だから、そういうのも見て、美術館も両方見ればいい。音楽だってモーツァルトだけ聴いてカラオケをバカにするじゃなくて、両方好きになったら楽しさも倍になるでしょ。そういうふうに「外を見ることも大事だな」と、実際に取材の生活を長く続けてきてすごく思うんです。

外を見るのに、人はあえて遠くのものを見ようとする。熊本の人は「東京で何が流行っているか」とか、「ニューヨーク、パリで何が流行っているかは見るけれど、「いま大牟田で、荒尾で何が起こっているのか」は見ようともしない。僕としてはそこに「ちょっと待て」みたいな思いがずっとあります。みんながいちばん見ようとしない、いちばん身近なもの――今回の作品なんていちばん身近な作品のはずですけど――に気がつくことがとても難しい。

キャバレー

今月、熊本は 2 回目ですが、先週来て審査をさせていただいたんです。審査だけして帰るのもなんだなと思って、1日早く来て熊本空港でレンタカーを借りて、熊本市に行かずに八代市に行ったんですよ。いま「八代」で笑いが起きたでしょ、この上下関係はいったいなんだと（笑）。でも、それは熊本に限ったことではなくて、博多の人は小倉を笑う。東京の人は大阪を笑う。ヨーロッパの人は日本を笑う。宇宙の人は地球を笑う。だいたい身近でちょっと下に見られているものを、いちばんバカにするんです。そこで八代も笑われてるけど、すごくおもしろいなと思ったんですよ。

先週、昼間に八代に着いて街をブラブラしていたら、いきなり出会ったのが、潰れた居酒屋の脇にいる巨大な河童。「え、何これ？」みたいな。田主丸や筑後川流域とはまた別の河童伝説があるそうで、八代の河童は中国から来たらしいのですけれども、河童のモニュメントが街

の至る所にある。居酒屋はもう潰れちゃってたけど、巨大河童はそのまま残ってる。「すごいな」と思ったけど、観光地図には載ってない。八代の商店街もシャッター商店街化が激しいわけですが、開いてるお店のおばさんに「巨大な河童がいるって聞いたんですけど」と聞いたら、「ああ」みたいな感じで「あそこよ」と教えてくれました。

その河童もすごいけど、河童の横になんとも言えない壁画があった。たくさんの河童を描いた壁画なんですけど、それがすごく上手なんです。どうしてこんな場所に、こんなクオリティのものが、と思って道行くひとに聞こうとしても目を伏せるし……まあ歩いてる人もめったにいないんだけど。町の文化財にしていただきたいくらい良くできてるのに。そこから奥に行くとすぐ川岸になるんですが、川岸の横には、またも巨大な河童がいる。どれだけ巨大か、隣のクリーニング屋と比べて見てください。八代、畏るべしです。

シャッター商店街にも実は 1 軒だけ元気な電気屋さんがあって、「ラジオクロネコ」というお店ですが、そこは一見、普通の電気屋でありながら、ショーウィンドウを見ると、ものすごく本格的な手作り真空管アンプが、ずらりと並んでいて、最初に来たとき思わず入ったんです。そこが、実はオーディオ・ファンには有名な手作りアンプのお店で、全国からマニアが注文しに来る。シャッター商店街のなかに、すごいお店が残ってるんだなと感心しました。

グランドキャバレー「白馬」

なぜ八代に行ったかというと、その主目的はここ「白馬（White Horse）」(fig.3–4) で飲みたかったからなんです。ここ数年、僕はキャバレーの取材をしてきまして。キャバクラじゃなくてグランドキャバレーですね。大きな店で、ホステスさんも数十人から百人単位でいて、生バンドが入っていて、ダンスフロアがあって、ホステスさんとお酒を飲んだり踊ったりもできて、ショーも入る。それがもともとのキャバレーです。

「キャバレー」というのは太平洋戦争後に出来た業態なんですね。終戦後に進駐軍が入ってきた時に、進駐軍の人を放っておくと日本の婦女子が全部犯される、みたいなことから急に外国兵用の売春施設をつくったり、エンタメ施設の一環でキャバレーが生まれました。

キャバレーは昭和 30 ～ 40 年代が全盛期で、いちばん流行ったころには東京だけで 1500 軒あったと言われてます。熊本市にも、もちろんいっぱいあったと思います。それがどんどん潰れていって、2018 年 1 月に銀座にあった「白いばら」という有名なお店が閉じまして、それから去年の冬（2018 年 12 月）には最後まで残っていたキャバレーハリウッド赤羽店と北千住店が閉まって、東京はキャバレー全滅になりました。東京だけじゃなくて、札幌、仙台、横浜、京都……どこにもない。大阪にはちょっとだけハコが残ってますが、生バンドも入らないカラオケ主体の営業になっちゃっているので、正統派のキャバレーが未だに残ってるのは、日本で八代の白馬だけなんです。全国で唯一ですよ。今年で創業 60 周年、現役のママは 93 歳です。こんな国宝級のお店が熊本市ではなく八代市にある。けど笑われる（笑）。いつなくなっちゃうかわからないので、すぐに行ってほしいですが。

ここは「八代亜紀がデビューした店」でもあります。八代亜紀が 16 歳の時に「どうしても

歌手になりたい」というので、18 歳と偽ってステージに立ったのが最初です。ただ八代はちっちゃい町なので（ちっちゃいといっても熊本に較べればですが）、すぐお父さんに見つかって引き戻されてしまったらしく。それでしょうがなく、歌が歌える別の職業ということで、バスガイドになったということからキャリアがスタートするわけです。前に凱旋公演をしたそうです。来月もどこかのマンドリン倶楽部と一緒に、ここでコンサートをするらしいので、万難を排して行っていただきたい。

昼間の白馬のあたりは寂れた街ですが、夜、ネオンに灯が入るとめちゃくちゃかっこいい。そのまんま映画の舞台みたいな。なにしろ 60 年間 1 回も改修（模様替え）してないから、完璧な昭和のスタイルが残ってるんですね。

fig. 3–4　キャバレー白馬

ホステスさんも最盛期は 50 ～ 60 人いたらしいのですが、今は 5、6 人。でも楽しく飲めて、しかも「80 分、90 分飲み放題で 5 千円」というお手頃値段で、生バンドをバックにステージで歌える。まあ、生バンドといってもメンバー 3 人しかいないんですが（笑）。こんなに楽しいところがあるんだと、最初に行っていきなり驚いた。昨日も美術館のスタッフと飲んでいて「白馬行ってる？」「はあ？」みたいな感じで、まったく反応がなかったのは悲しいことでした。こういう、身近に残っていて、そのうちとか思ってるうちになくなっちゃったところを、みんな「もったいない」とか、「行っときゃよかった」とツイートするでしょ。ツイッターにそういうこと書くやつに限って行かないんだから。行く人は黙って行ってる。熊本駅から電車に乗れば 1 時間もかからないんだし。

キャバレー「ベラミ」

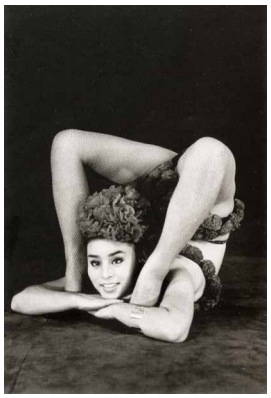
そういうキャバレー探索のなかで出会ったのが、北九州の若松にあった「ベラミ」（fig.5）というグランドキャバレーです。若松はかつて日本最大の石炭積出港でしたから、ものすごく活気があって、お金も集まってたわけですが、いまはもう死んだような街になっていて、歩いていても哀しい雰囲気です。

fig. 5　キャバレー・ベラミ

その若松で、ある物件を僕の友人が買ったら、たまたまそこがベラミの従業員寮だったんです。キャバレー・ベラミは 1989 年に閉店しているのですが、その従業員寮にグラスだとか灰皿とか、店の備品がそのまま残されていたと。で、使いようがないのでガレージセールでもやるかと整理していたら、段ボール箱が1箱出てきて、開けてみたらベラミのステージを飾った踊り子さんたちの宣伝用の写真が千何百枚入ってたんですね。

見つけた友人たちは「これはすごい!」と思ったけれど、九州の出版社はどこも興味も示してくれない。なので僕のほうでプリントを全部スキャンして、電子書籍にさせてもらったんです。USB メモリーに入れた、巨大サイズの PDF ファイルとしての書籍。小さなメモリーをパソコンに差し込んでクリックすると、1800 枚ぐらい踊り子さんや歌手、芸人さんたちの写真が出てきます。もう、そのまま往年の日活映画の世界でした。悪党が経営するキャバレーに小林旭が乗り込むと、白木マリが踊ってるみたいな。

そのころはキャバレーが日本全国に何千軒とあったわけだから、ダンサーも何千人といたわけです。でも、そういう人たちは全員いなくなってしまった。キャバレーがなかったら踊るところがないですから。しかもほとんど記録が残っていない。東京の有名なキャバレーとかの経営者やマネージャーが思い出を語る本はけっこう出てるけど、ダンサーや芸人のことを知る資料はひとつもない。何千人もいたにも関わらず。お店に売り込むための宣伝写真ですから、写真の端や裏面に名前と、ひとによっては「アクロバットダンス」みたいな特技が書いてありました。なのでいちおう、名前をすべてネットで検索してみたのですが、ほとんどだれもヒットしない。みんな消え去ってしまって、だれも調べてようとすらしてないんですね。



figs. 6–8　キャバレー・ベラミの踊り子

当時のキャバレー・ダンサーはすごく競争が激しかったと思うので、ただきれいで裸になって踊る、というだけでは雇ってもらえなかったりする。だからウリとなるワザが必要だった。たとえば写真だけだと、ただ寝てるみたいにしか見えないけど、実はこのひと四十八手を解説しながら踊るひとだったそうです（fig.6）。言いかけて「ちょっと、どうしようかな」と思いましたが、こんな話を美術館でしちゃってすいません（笑）。あと逆立ちしながら歌う歌手とか、ネグリジェを脱ぎながらサックスを吹くとか（fig.7）、全員女の子のグループサウンズとか、仮面の３人組ダンサーとか、写真を見てるだけですごくおもしろいんです。

アクロバットダンスというのもありましたが（fig.8）、アクロバティックなポーズを決めながら音楽に合わせて踊るパフォーマンスで、当時はすごく受けたそうですが、いま受け継いでるひとはたぶんひとりもいません。完全に消え去った、死に絶えた伝統なのですが、ほんとにすごい。それから、手品師なんだけどアシスタントが何故か半裸の女性とか。ヘビと一緒に踊る女の人もいれば、ロウソクと一緒に踊るひとも、金粉ショーをするひともいました。蛍光塗料の水玉を全身に描いて、場内をブラックライトにして踊るひともいたし、「夜光落書きショー」と背中に書いてあるひとは、蛍光塗料が入った容器を持って客席を回ると、お客さんがこの子の身体に落書きをして、そうするとそれがブラックライトで浮き上がるという、わけわかんない独創的なショーでした。こういうひとたちが無数に存在していて、日本中のキャバレーを回っていたのに、そのあとどうなったのか僕たちはまったく知らないままでいる。

遠くのもの、みんなにヨシとされてるものを見てるあいだに、大切なものがどんどん失われていくことを、すごく痛切に感じています。それで、残すことはできないけれど、せめて記録はしておきたいと孤軍奮闘みたいな気持ちで取材を続けてきたんです。

シルバー文化作品展とおかんアート

で、今日の本題。この展覧会「熊本アートパレード」で「鋭いな」と思ったのは、隣の「シルバー文化作品展」[1]と繋がっているところですね。熊本アートパレードを見ているうちに、知らず知らずのうちにシルバーの域に達しているという（笑）。作為的な会場構成というか、こっち側（アートパレード）から見ていくと、知らない間にあっち側（シルバー）に行くという。しかも一瞬、その違いがわからない。これは「アートパレードなのか？」「シルバー文化なのか？」「もしかしたら両方？」みたいな。それが「鋭いな」と思ったんです。意図的かどうかわからないけど（笑）。

シルバー文化作品展でも、すごい作品がいろいろ出てたじゃないですか。僕はずいぶん以前からアウトサイダー・アートを取材してきました。アール・ブリュットとも呼ばれていますが、それは障がい者が作るアートだったり、専門の美術教育を受けてない、たとえば「神様のお告げを受けて描いた」とか、何かの拍子でスイッチが入って描いた作家たちがいっぱい世の中にいる。昔で言えば山下清もそうですよね。今では有名なアメリカ作家のヘンリー・ダーガーもいます。熊本でいえば、写真でスーパースターになった西本喜美子さんもそうかもしれない。そういう人たちがつくるもの、それは美術と呼ばれてきた体系の外側で生まれたものだったから「アウトサイダー」のアートなんですが、いまやあまりにもそれが流行ったというか、みんなに認知されたお陰で、インサイダーにもなっている。価格的にも。

すごいオシャレな空間がある。安藤忠雄さんみたいな、打ちっ放しのコンクリート壁がバーンとあって。そこに、たとえばヘンリー・ダーガーであろうが、西本喜美子であろうが、アウトサイダーの作品がポンと1点あったとして、昔はかなりの違和感だったかもしれないけど、いまでは全然 OK なわけですよ。「あ、趣味いいですね」みたいな。

じゃあいまの時代で、かっこいい空間をたった 1 点でぶち壊せるアートというのはあるのだろうか。作家性に溢れた建築作品に対抗できるようなアートはあるのか？という疑問を突き詰めていって辿り着いたのがいわゆる「おかんアート」と呼ばれるものでした。

何年か前に「おお！」と感動して調べ始めたら、世の中には同時期におかんアートに目覚めた人たちがいて、各地でいろんな採集活動が行われているのを知りました。自費出版でおかんアートの本をつくっちゃった人たちもいるし、いまはみんなで手分けして全国おかんアート収集という地道なフィールドワークを続けている感じです。

おかんアートと便宜的に呼んでますが、いわゆるお母さんよりも、むしろおばあさん、おばあさんが作るアートですね。そしておばあさんが作るアートというのは、実は最近のものなんですよ。

かつてはおじいさんもおばあさんも、家族の一員として労働の分担があった。農家だったら年を取って田んぼには出られないけど、家で縄を編むとか、孫の世話をするとか。家の中でもいろんな仕事があって、それなりに忙しかったと思うんですね。けれど大家族制が崩れていくにつれて、ヒマができちゃったわけです。そこでヒマな時間になにをするかというと、なにか作り始めるわけですよ。

世の中にはおかんアートだけでなく、「おとんアート」もあるんですが、おとんアートというの

はだいたいつまらない。五円玉で五重塔を作ってみたり、割り箸で帆船を作ってみたり。重いんですよね。求道者というか、道に入っていくという。おかんはつくったものをどんどんくれるけど、おとんはくれないし（笑）。

おかんアートはこみいったものが少ないですから、慣れたらすぐできちゃう。なかなか売ってはなくて道の駅の端っことかで売ってるくらい。なので買えはしないけど、くれる。しかも、くれてもあんまりうれしくなかったりする。

fig. 9　タオル地の服

fig. 10　ボトル人形

fig. 11　ロールちゃん

たとえば、お手洗いを出たところに、よくあるじゃないですか。ただのタオルでいいのに、ワンピースみたいに縫ってみたりする（fig.9）。そこにはなんの意味もないんですが、なんとなくやってみたくなる。これがひとつあるだけで、安藤忠雄空間にも勝てるでしょ。おしゃれ建築台無しだと思いませんか。

ウイスキーの瓶を使った人形（fig.10）はスナックのボトル棚にだいたい飾ってあったし、最近だとペットボトルのキャップで作るキーホルダー。キャップに厚紙を丸くくり抜いたひさしをボンドでくっつける。あと、道の駅でかならず売ってるのが手編みの草履。

「ロールちゃん」（fig.11）という名前がちゃんとついてる、トイレットペーパーの予備を入れておく人形とか、ヒモをほどいてつくる犬とか。あと軍手はおかんのマスト・アイテムらしくて、軍手を見ると人形にしたくなるらしい（笑）。みなさんの実家にもかならずありますよね。玄関の下駄箱の上とか、ピアノの上とか。今回もすごい力作が出てたのが、いわゆるブロック折り紙ですね。これはもともと中国文化のなかにあったのが、日本では脳梗塞とかのリハビリで普及してます。

アート好きの、意識高い系のひとたちにとっては「もう本当にやめてほしい」と思うでしょうし、作ってるほうもアートだとは思ってないでしょうが、「たったひとつでその場の価値観を揺るがす」という意味で、見方を変えればそれが超強力なアート作品になると思うんですね。

おかんアートは、実は日本だけじゃなくて、老人が働かなくてもいい先進国ならどこでもあると言えます。これはソニック・ユースという、すごく有名なロックバンドの CD ジャケットに使われた作品で、アーティストはマイク・ケリーという、数年前に自殺してしまいましたが、アメリカの超人気作家でした。でもこれって、完全にアメリカンおかんアートですね。アメリカ人のお

母さんはソックスで人形を作っては、大都市に出て行った息子や娘に送り付けて嫌がられるのが定番らしいのですが、そういうことが各国で行われているわけです。でも、味方というか、プレゼンテーションのしかたをこういうふうにすれば、いきなりかっこよく見えてくる。それがすごくおもしろいなあと。

民芸というのがありますよね。民芸とは風土がつくりだすものです。郷土玩具とかもそうですが、「郷土」というだけあって、たとえば熊本の人間と青森の郷土玩具は違うわけです。違う風土が育んだものだから。でも、おかんアートは全国、全部一緒なんです。風土に関係なく。ここにもつくっていらっしゃる方がいるでしょうが、おかんアートはまず、全国の手芸ショップなどでキットとして売っているんですよ。それを買ってつくってみる。家でやってみたり、コミュニティの集会所とかに集まって、お茶とかしながらだったり。だから最初は全国各地で誰が作っても一緒なんです。だけどそのうちに上手い人、手先の器用な人、クリエイティブな人がいて、「ちょっと変えてみよう」みたいな感じで、オリジナルなものがでてくる。

そのうち、人前にデビューする日が来ます。アーティストだったらギャラリーで個展とかになりますが、おかんアーティストの場合はまず病院。病院の診察室の受付とかに持って行くというのですね。「これ飾って」みたいな感じで。それがいっぱい並んでると、順番待ちのおかんたちが「あら、これは誰が作ったの、教えて」みたいな感じで交流が生まれていく。だからおかんアートのギャラリーは病院、あとは信用金庫のウィンドウとか、居酒屋のカウンターとか、いくつかありますが、そういうところです。

地方取材のときに手芸店のショーウィンドウですごくかっこいい結束バンドの犬を見つけて、「キットで売ってますから」と言われたけど、「いや、絶対できないと思うので、この見本を買わせて下さい」みたいな感じで、むりやり譲ってもらったことがありました。それをアップで撮影したのが森山直太朗さんの CD（『嗚呼』2016）ジャケット（fig.12）です。このときは僕からいくつかアイデア出したけど、森山さんのほうで即決したのがこれ、「おかんアートでいきましょう！」と言われました。「ほんと？大丈夫？」と確認したけど、「いや、もう絶対これがいい」というので。これ、歌詞カードにも珠玉のおかんアート写真がいっぱい入ってるので、よかったら見てください。

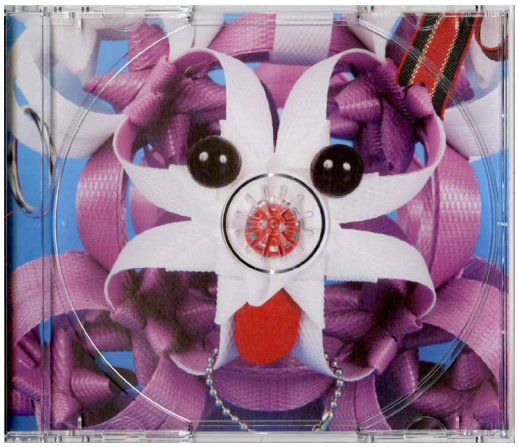


fig. 12　森山直太朗『嗚呼』

ね、こうして CD という商品になってみると、不思議なテイストの作品に見えないこともない。それが実はものすごく身近にある。実家とか（笑）。やっぱり、いちばん近いところにあるものが、いちばん見えにくいんだと思うんです。

一番バカにされて一番カッコいい暴走族

現代日本においていちばんバカにされてきた存在とはなにかというと、いろいろあるなかで暴走族はやっぱり外せないと思うんです。きょうは市長さんもいらっしゃる美術館で「暴走族の話をする」というのがうれしいですが（笑）。

暴走族は家庭でバカにされ、学校でバカにされ、社会でバカにされ、三重苦でしょ。しかも都会の暴走族から、田舎の暴走族はバカにされたりもする。都会の暴走族は走り屋っぽくシンプルなバイクを好んできましたが、田舎の暴走族ほどゴテゴテ系の過剰な装飾に凝る傾向があって、都会の暴走族はそれをバカにしてたわけです。だからもはやカースト外のような田舎の暴走族たちが、実はオリジナリティに溢れたバイクをつくっていることを知って、驚愕したことがありました。ただ、そういう改造バイクはもちろん法規外の存在なので、すぐに警察に捕まって没収されたりする。なので自分では撮影が難しいので、暴走族雑誌に広告を出したんです。「君のバイクの写真を求む。本に載るかもしれないぞ」みたいな感じで。そうやって一冊の作品集にしたのが『Hell on WHEELS―暴走族の改造単車コレクション』（fig.13）です。

fig. 13 『Hell on WHEELS―暴走族の改造単車コレクション』

fig. 14 改造単車

暴走族の改造単車は、アメリカのハーレーの改造とは、また違うテイストですね。ただいかついだけじゃなくて、どこかお茶目な部分もあって、非常に日本的なデザイン感覚だと思います。ずーっと前から僕は暴走族の改造単車の展覧会をやってみたかった。いろんな美術館に提案したけれど、鼻で笑われておしまいでした。

でもアメリカではイージーライダーみたいなハーレーの改造を、「これはきわめてアメリカ的な文化である」ということで、ニューヨークの一流美術館で、改造バイクを数十台並べた展覧会が開かれてます。それが日本ではどうしてもできない。それで、「やってくれないなら自分でやるしかない」ということで、数年前に広島市現代美術館で個展をした時に、元暴走族の頭に頼んで一台つくってもらいました。「思いっきり田舎風にしてください」とお願いして。ちょうどそのころ広島では市をあげての暴走族撲滅月間だったので、ちょっと問題になったらしいのですが、「まあ、アートですから」ということで。全世界にモーターサイクルギャングはたくさんいますが、ここまで独自の美学、立体作品に昇華したのは日本人だけだと思います。

きょう美術館に来ていただいたかたは、そういう田舎の暴走族の騒音を聞くたびに腹を立ててるでしょうけど……次の土曜の夜とかに「ブンブンブブン」とかいう爆音が聞こえたら、急いで窓を閉めるのではなくて、外に出て見に行ってほしいんです！（笑）。

なぜかというと、改造単車の造形もそうなのですが、もうひとつ日本人の暴走族だけが生み出したのが、アクセルミュージックです。「ブブブブン」とやって、ある種のビートを生み出しながら走り去る。あれは日本人しかやってないんですね。

速く走るためではなく、いい音が出るようにエンジンを改造したりもする。この子たちは，バイクが楽器だということを発見しちゃったわけですね。バイクに乗る人はわかると思いますが、ギアがニュートラルの状態で「ブンブン」やることでリズムが生まれるのですが、いざ走るとそれにクラッチをつないだり切ったりが加わりますから、そうすると音の高さが変わってきます。つまり音程を変えられるということは、メロディーがつくれるということですね。

YouTube でいろいろ探していたら、真っ暗な場所で撮っているのでテールランプしか見えない動画がありました。奏でられている曲は、皆さんもご存じの曲だと思うので聞いてみましょう。ボリュームを大きくして下さい……そう、ご存じ「水戸黄門のテーマ」です。

元暴走族の友だちに聞いたら、これはけっこう難易度高い一曲だそう。でも「押さえるべき基本曲のひとつです」と言われました。「鉄腕アトム」と並ぶ重要レパートリーであると。

この動画は本人じゃなくてだれかが撮ってるわけですけど、とにかく真っ暗ですよね。街路灯すらない。こんな爆音出して走ってたら、都会なら、警察がすぐにやってくる。でもここは警察からも放っておかれるほどの田舎。それもギャラリーはゼロで。つまりこの子は誰もいない場所で、誰も聞いてない音楽を、ひとりで奏でているということ。そのすごみですよ。曲がお笑いだというだけで。

この動画を見せるといつも爆笑されるんですが、これと同じことが 40 年前、ニューヨークで起きたんですね。それもマンハッタンのお洒落な場所でなくて、サウス・ブロンクスみたいな、貧しく荒れ果てた場所で。お店で遊ぶ余裕がない子たちが、街角でパーティーをやるときにターンテーブルを持ち出したわけですが、それまでターンテーブルというのは単にレコードをかける

道具だったんです。ある日、そういう子たちのだれかが、レコードをキュキュってこすることによって、独特の音やリズムを出せることに気がついた。これがスクラッチという表現が生まれた瞬間で、それがヒップホップ特有の音楽表現につながっていきます。

つまり、それまではレコードをかける道具だったターンテーブルが、そこで初めて楽器になった。それがマンハッタンの知的なアーティストではなくて、ブロンクスの貧しいキッズたちによって発見されたということが、すごく信じられる。

世の中でいちばんバカにされてきた田舎の暴走族が、楽器としてのバイクを発見したのも、同じくらい素晴らしい出来事だと思うのですが、こっちのほうはいまだにまったく無視されたままで、悔しくてたまらない。そういうことが世の中のいろんなところで起こって、だれも記録しないうちに消えていくんです。

身近なところにあるアートの体験

今回のトークでいろんなものを見せましたが、ニューヨーク、ロンドン、パリみたいな遠いところに行かなきゃ見られないものなんてひとつもない。むしろ八代とか大牟田とか、実家の玄関とか、自分のいちばん近くにあるものばかりです。近すぎるから見えない、そういうところに、もしかしたらずっと遠くと同じくらいすごいものが見つかる可能性があるということです。そういうふうに思えたら、東京行かなきゃ、ニューヨーク行かなきゃみたいなこと言う前に、「ちょっと待て、八代がある」とか「実家があるぞ」と。どっちが良い悪いではなくて、視界を広げるってそういうことですよね。それまで実家のピアノの上で埃被ってたものが、いきなり輝いて見えたり。

このあと、お時間あったらもういちど「シルバー文化作品展」を見てみてください。「これ、もしかしたらTシャツにしたらかっこいいかも!」とか思えたりするかもしれない。そういう視線の変化、「くだらない」と思っていたものが、いきなり「オッ!」となる。アートの役割で、これ以上大切なものはないと思うんです。

それまでかっこわるい、ダサいと思いこんでいたものが、急にかっこよく見えてきたり、いいと思っていたものがダサく見えてきたり。そのもの自体は変わっていないのに、自分の変化によって、それがまったく違う存在に見えてくるというのが、アートの奇跡であるし、いちばんスリリングな瞬間であり体験だと思うんです。

いろいろお見せした中で、どれがみなさんにアピールしたのかわかりませんけれども、家に帰る途中の街も、見慣れた部屋も、今朝とはちょっとだけでもちがう感じに見えてきたら、すごくうれしいです。

90 分めいっぱい、お話しさせていただきましたが、このへんで終わりとします。どうもありがとうございました。

編集：池澤茉莉（熊本市現代美術館）

註

1 「第 24 回シルバー文化作品展」は「第 30 回熊本アートパレード」と同時開催した共催事業。

※本掲載にあたり、審査員講演会の記録から抜粋し、都築響一が加筆した。

※都築響一が審査員を務めた公募展「第 30 回熊本市民美術展 熊本アートパレード」（テーマ「かっこわるいからかっこいい」）については、熊本市現代美術館ウェブサイトに掲載した都築響一による「審査員講評」を参照。

※写真提供：都築響一